

強い者ほど飛ばされる!? 奇跡の技法「合気」の正体とは?

特集第3章

大東流合気柔術 居合心剣流柔術

心技清榮館

蒔田修大

言葉を選ばずに言ってしまうなら、  
武術史上、最大の発明は「合気」なのではないだろうか？  
なぜ、あれほど見事に「小」なる者が「大」なる者を飛ばせてしまえるのか？  
そんな「合気」の秘密に迫らねば、本特集の甲斐もないというもの。  
本章では、大東流不世出の名人と讃えられる堀川幸道師の「合気」を  
体現し続ける、心技清榮館、蒔田修大師範に本誌初取材敢行！  
「合気現象」解明に挑む!!!

取材・文◎本誌編集部

「力を使わぬ」武術技法の極致!

「合気」からの解答

合

まだ取材というよりは取材交渉の段階、初めて蒔田師範とお会いした際に、じゃあ実際に手を取ってみよう、という事になった。

正座している蒔田師範の右手を両手で思いつき押さえつけて動かないように固める。次の瞬間にはひっくり返されていた（左掲写真参照）。

ひっくり返された事は、いいのだ。

別に自分としてもひっくり返されない自信があった訳でもない。驚くのは、ひっくり返されるほど体勢の変更を余儀なくされているのに、無意識にずつと蒔田師範の右手を握り続けてしまっていた事だ。別に「離すな」と言われていた訳でもない。何も抵抗感がなかったのだ。だから、まるで「ひっくり返された事をいつまでも身体が認識

できないでいる」といった感じ。何なのだ？ この感触は。

### 堀川幸道師の「投げ」

蒔田師範は、堀川幸道師に長年師事し、幸道会の東京支部長を務めてきた人物だ。平成16年に独立して「心技清榮館」を立ち上げ、現在は知る人ぞ知る秀抜な「合気」の使い手、指導者として技術練磨と伝承、後進育成にあたっている。

「私が初めて堀川先生に『手を掴んでご覧』と言われた時の経験は忘れられません。嬉しさもあって、つい必要以上に力を入れて握ってしまったんですが、気が付いた時には天井と畳がひっくり返ってました。叩きつけられてい

たんです。それ以来、堀川先生の技を追究してきているんですが……」

「永世名人」の称号を持つ堀川師の「合気」は、数ある大東流の名家たちの中にあつて「最終形」とも言われている。熟練するほどに動きがコンパクトになっていくのが技の常だが、堀川師の動きは本当に小さい。そこまでに凝縮されているからこそ、「合気」が奇跡とまでに言われる由縁となっているのだ。

その小さい中に、確実に何かが起こっている。それは何なのか？

聴き流しかけていた蒔田師範のある言葉に気付いてハツとする。

「このまんまで……」と、握った手の格好を示して見せたのだ。

これだ。これは「取材交渉」の段階



大東流合気柔術永世名人 堀川幸道師



亡くなる直前（昭和五十五年）の堀川師から与えられた三段の免状



正式取材前、初めてお会いした時の一コマ。蒔田師範の右手を両手で思いつき押さえつける編集部員。あっという間にひっくり返されてしまうが、その両手は握り続けられたまま。

### 蒔田修大（まきた しゅうだい）

昭和44年12月 大東流合気柔術幸道会入門、名人堀川幸道師範に指導を受ける。昭和62年9月 幸道会「東京支部長」として道場開設を認可される。平成8年9月 七段を授与される。平成10年10月 師範を認可される。平成14年3月 幸道会「東京本部長」として道場開設を認可される。平成16年11月 幸道会から独立「心技清榮館」を設立。大東流合気柔術と居合心剣流柔術を始める。堀川幸道師の柔らかな合気を継承し、「生涯武術」を掲げ、現在もお練磨を重ね続けている。



# 「四方投げ」にみる「負」と「正」の合気

蒔田師範が区別している「負」「正」の合気を「四方投げ」で比較。「負」の合気による四方投げは、自分自身が動いて相手の裏へ回り、投げ落としていくが、「正」の合気の方は自分が動かさず、逆に相手のほうが振り回されている。



## 「正」の合気



で自分がさせられた経験と繋がっている。これが「合気」を解くキーワードに間違いない。

さて、「合気」である。投げ技特集において、どうしても避けられなくなかった「合気」。なかなかこれを説明する言葉を持つている武道家は少ない、というのが現実なのだが、蒔田師範は明快な言葉でまずこう言った。

「合気には「負(マイナス)」の合気と「正(プラス)」の合気とがあります。『負』の合気というのは、相手の力を逸らしたり、便乗したりする方法です。合気の修練はまず『負』の方から始めます」

例えば……と示して下さったのは「四方投げ」だ。

して示されたものは、言ってみれば見ていて力学的に納得がいく形だ。

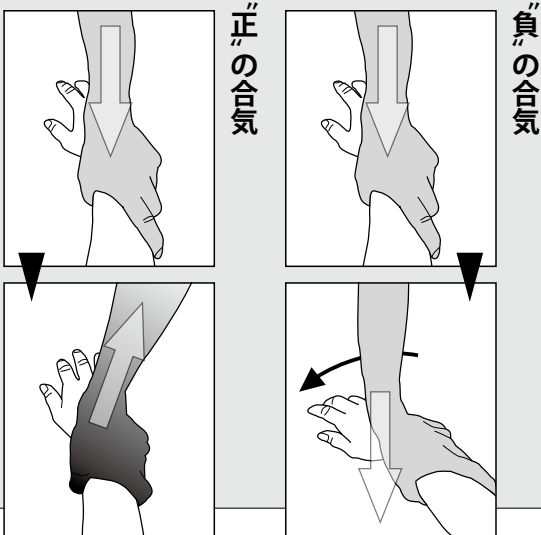
相手の力をまともに受けないように丸く逸らしながら、裏へと移動する事によって崩して投げる。

「自分が移動する事によって優位なポジションを取って崩す、というのは武術としてあつていい方法論だと思えます。でも、これはあくまでも、相手の対応が自分より遅い」事を期待しての方法論なんです。私が堀川先生に言われて忘れられない言葉はいくつもあるんですが、その一つに『動くな！ その場で投げろ！』というのがあるんですよ」

「正」の合気による「四方投げ」として示されたものは、自分ほとんど

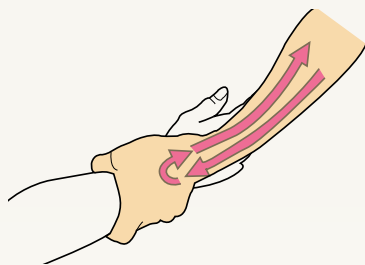
### “接触点”で何が起きているのか？

右掲写真下側「正」の合気による四方投げでは、掴み手をわずかに差し上げただけに見える写真02にしてすでに、爪先立って大きくのけぞるほど体を崩されている。これは実は掴んだ側自身の力によるもの。「負」の合気は相手の力を逸らしたり、便乗する事によって崩していくものだが、「正」の合気は、「相手の中に入っていく」感覚の方法論なのだ蒔田師範は語る。実際に行うに当たっては、「對抗して打ち勝つ」のでない所に注意が必要で、掴まれた側はむしろ何もしないかのように相手自身に力を選しているのだ(次頁コラム参照)。結果として掴んだ側は、自分自身の力をもって自らの身を崩してしまう格好となる。



## 力は“一方通行”で終わらない!?

蒔田師範は「力は必ず還る」と表現する。“力”のように目に見えないものはつい「一方通行」に消えてしまう」と考えてしまいがちだが、力（エネルギー）は物理学的に「別の運動」や「別な形のエネルギー（位置エネルギー、摩擦、熱など）」に変換されたりしない限りは消えてなくなったりしない（力学的エネルギー保存則）。力は何も仕事をさせなければ、“還る”しかないのだ。



## 投げているのは 相手自身の力

動かず、むしろ相手が円弧を描くように誘導され、投げられてしまうものだった（前写真参照）。  
「相手の中に入っていく」感覚です。かといって相手に向けて力を加えていくという訳じゃない。対抗しては駄目なんです。相手自身の力を相手に還してやっつけるだけなんです。血液だって循環してるでしょう。そういうものと同じに考えればいい。部分的に見てるとわからないけど、実は何でも「行きっぱなし」じゃない。それが自然の摂理なんです」

自分が「壁」になれたら、と考える  
とわかりやすい。相手がいくら押し込んできても、その力は「反作用力」として相手に還っていくだけだ。しかし、「壁」になろうと身体を固めようとするのでは「対抗」なのだ。あくまで自側は力を使わない。そこが何とも難しい。

### 相手が強いほど、強い投げとなる

座した蒔田師範の片手ずつを、二人がかりで力一杯抑え込む。それを一瞬

座した蒔田師範の両手を、二人がかりでそれぞれ、力一杯抑え込む。それが一瞬のうちにそれぞれひっくり返されてしまう。この間、蒔田師範は投げを成立させる（＝相手の力をもらい手を返す）ほどには両手を動かしていない。ここで両者がひっくり返っているのは、あくまで自分自身が「抑え込もう」としてかけている自分自身の力の反力によってのものなのだ。ひっくり返されてなお掴み続けてしまう両手は、「力の対抗状態」が生じていない事を示している。

にしてひっくり返してしまう（左掲写真参照）。

技としては、まあ、見ない形でもないのでが、これまでのお話を踏まえて改めて注目してみると、蒔田師範が両手をほとんど動かしていない事に改めて驚くのだ。これは掴まれた手を鋭く返す事によって相手を崩している技ではない。ひっくり返しているのは、あくまで相手自身の力によるものなのだ。翻って、冒頭で紹介した自分自身がひっくり返された体験を思い出してみよう。あの時は自分が「力一杯」抑え込

# 相手が強いほど、力を入れるほどに、宙を舞うほどの「技」となる

掴んで抑え付けてきた相手の力をそのまま、還してやる。事によって、体が宙を飛ばすほどの「投げ力」が発生する。相手が抑え込もうとする力が強いほど、その相手が投げられる勢いも強くなる。左掲写真は2列とも「蒔田師範の左手を右手で抑え付ける」所から始めるまったく同じ形だが、掴む側の力の入れ具合（踏ん張り方）によって、投げられる回転運動も微妙に変わってくる。



られてると気が付かぬままに投げられてしまうのが合気の投げなのだ。それは受身の取りようもない。

## どうにかしても「入って来」

心技清榮館では大東流合気柔術と並び、居合心剣流柔術という名の教伝も並行して行われている。そもそも大東流には剣の理合が色濃く反映されているものだが、ここで謳われている「居合」とはいわゆる「剣術」よりも瞬間的「触れたら斬れる」というニュアンスが重視されたものだ。すなわち、間合いとかタイミングとか、見た目でもわかりやすい物理的要因よりも、「合気」なのだ。

得物を用いても、その接点から瞬間的に崩してしまう「合気」の技が成立する。これも、「接点から相手の中に入っていく感覚」によって為されるのだという。

「接点がなければ「合気」はかけられないんです」と蒔田師範は仰るが、逆に言えば、どこでも、接点さえあれば、「合気」は掛けられる、という事でもある。相手がその接点を通してこちらの事をどうにかしようとしてきてくれさえすれば、「合気」が成立するのだ。

さて、その「合気」を成立させる決め手、「相手の中に入っていく」……とは、どうすればできるのだろうか？「相手に向けて力を加える」ではないとすると、なかなか感覚的にも難しい。

んだりしなければ、ひっくり返されなかったのだ、きつと。

さらに、合気によるごくシンプルな投げ技を見せていただいた（右掲写真参照）。

蒔田師範が力づくで何かをしている訳でない事は、一見して明らかだ。それでいて、相手が宙を舞うほどの「投げ力」が生じている。相手自身の力によつて。

相手自身の力がそのまま投げられる力となる訳だから、相手の力が強いほど投

げも強くなる。よく考えてみると、これは凄い事だ。恐いものなしではないか。

また、合気の技は「ヤラセ」に見られがちだがどうしてもあるが、それもさもありなんなのだ。そもそも原理的に、投げられる側が自分自身の力で投げられている、のだから。しかし、これほどの勢いで自殺的に飛べる人もいま、と間近で見ると思う。

そうなのだ。この投げにはいわゆる柔道や合気道的な「受身」が成立して

いない。受けをとつていただいている道場生の方々は、慣れはしている様子ではあるが、けっこうなダメージを被つてもいるようだ。

「ある時、受身の稽古をしていたら堀川先生に『受身なんてやるな。受身の取る技なんて技じゃない！』と言われたんです」

と、蒔田師範は語る。

力の対抗が生じていないので、掴みに違和感なく、投げられた後ですらなお、掴み続けてしまう。いわば投げ

# 「手」でなくとも 投げられるのが 真の合気!

左掲例は短い袋竹刀ながらも「剣」への応用。合わせた瞬間に飛ばされてしまう様が凄まじい。力で横方向へ押し込もうとしても「力比べ」になってその優劣でせいぜい腕が行ったり来たりするくらいの事にはかならないはずだ。それがこんな現象になってしまふのは、相手にとて力が対抗している違和感がないままに、自分が左方向へ押し込もうとする力をそのまま「気」を受けてしまっているから。ここで導入されているのはもちろん「合気」であり「接点から相手に入っていく」感覚によって為されている技なのだ。



他人が動かそうとしても簡単には動かされにくいくらい、しっかりと立てて両手で固定された杖。「動かされないように」固定させる所がポイントで、この時点で持つ側は全身を遣って思いっきり掴んでいる。その力を相手に選してやると、予想もしなかった方向に投げ飛ばされた。投げられた後も手は杖を掴んだままである所に注目。

「力を還す、というのはさっき言った通りですけど、それはベターと一つなかりになっているものじゃない。力というのは必ず切れ目があって、細かくバトンタッチしているものなんです。そういう切れ目をとらえられれば、容易に入っていけるんですよ。例えば、1トンの力が出せる人でも、いきなり1トンは出せない。1ミリグラムから始まり、その過程には細かな切れ目が必ずある。その途中をとらえられれば、1トンの力を受けずに済む訳ですよ」  
当然ながら、感覚的な話になるのだ。  
どのタイミングでどこを狙って、などというように目に見える力学レベルで語れる話ではない。それでは、とその感覚的に絞ってみる。  
初めて「相手の中に入っていった」感覚を覚えていきますか?……と、伺ってみました。  
■ 蒔田師範はしばらく考えた後、こんな言葉を下さった。  
「それは覚えてないけど、堀川先生に入ってから、この感覚は覚えてますよ。自分には何の違和感もなく、何のズレも生じなかった。そんな事ができるのは、素直だからです。堀川先生はとっても素直な方だった。『合気』には素直さって大事だと思いますよ。大東流の技は、掴まれたり、自分より早いタイミングで打ち掛かれたり、最悪の状況設定から始まっているでしょう。逃げられない状況なんです。逃げられないならどうします? 相手に向かって入っていくしかないじゃないですか」